

アジアの

風

第11号

2006年7月10日発行

題字：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

再出発 アジア児童文学日本センター

2004年8月に第7回アジア児童文学大会を終了したあと、このアジア児童文学日本センターという団体をどうすべきかについていろいろと議論を重ねてきました。アジア児童文学大会の準備と運営という主な役割りは終わったのだから解散すべきだという意見がある一方で、情報センターあるいは海外団体・機関等への窓口というはたらきは重要だから存続させるべきだという意見もありました。最終的には後者の意見をベースに「アジア児童文学日本センターの再発足についての趣意書」を事務局で作成し、会員ならびに会員外で第7回大会に参加した方々に対して「再発足」に賛成か反対かをアンケートしました。

その結果、「賛成して入会する」が40名、「賛成だが入会しない」が6名、「その他」1名となり、圧倒的多数で「再発足」が支持されました。これに基づき、去る4月15日午前11時から東京都新宿区の日本児童文学者協会事務所をお借りして2006年度総会を開き、再発足が承認され、それに伴う規則改正と役員選出、さらには新年度の事業計画及び予算も承認されました。総会出席者からは「新しい情報を豊富にあつめ提供すること」「資料センター的な機能もってほしい」「これまでのアジア児童文学大会や交流の歴史をまとめること」「情報の収集・提供にもっと予算を使うべし。会費はもっと高くしてもよい」など、前向きの発言が多く、事務局としては心強いことでした。情報収集については、中国語圏、朝鮮語圏、東南アジア諸国、南アジア諸国の児童文学の専門家に定期的に情報を提供いただくための委嘱を近く行う予定です。

なお役員選出の結果、会長：畑中圭一、副会長：中尾明、きどのりこの3名は再選、副会長に新たに水上平吉が選ばれました。理事は河野孝之、仲村修、成実朋子、花井都茂子、藤田のぼる（いずれも再選）の5名、監事は中由美子（再選）と小笠原治嘉（新）となりました。（写真は06年度総会に集まった人たち）



第8回ソウル大会に23名参加

8月21日から25日まで大韓民国ソウル市で開催される第8回アジア児童文学大会には、次の21名と講師として大会本部から招聘を受けた西田良子氏と西田直樹氏、計23名が参加します。

五十嵐秀男（東京都墨田区）、伊藤徳子（武蔵野市）、大倉尚美（北海道せたな町）、大竹聖美（日野市）、大竹桂子（武蔵野市）、丘修三（神奈川県藤野町）、きどのりこ（府中市）、キム・ファン（京都市）、仙波敦子（東京都文京区）、田中すみ子（座間市）、たに・けいこ（鹿児島市）、中尾明（鎌ヶ谷市）、中村悦子（鹿児島市）、成実朋子（豊橋市）、野崎斐子（武蔵野市）、畑中圭一（京都府木津町）、保坂登志子（流山市）、馬場与志子（福岡市）、洪峯雄（大和市）、水上平吉（北九州市）、村上百合子（福岡市）〈五十音順 敬称略〉

なお論文発表者およびそれぞれの発表テーマは次のとおりです。

- ① キム・ファン 「環境をテーマにした韓日の児童文学への提言」
- ② きど のりこ 「アジアにおけるファンタジーの展望と未来」
- ③ たに・けいこ 「絵本で結ぶ人と自然——共生志向の児童文学」
- ④ 畑中 圭一 「在日コリアン文学について——詩人・作家の言語意識」

風のたより

キム・ファンさん おめでとう！

ノンフィクション大賞最優秀賞を受賞

京都の作家キム・ファン（金兎）さんが「第1回子どものための感動ノン・フィクション大賞」（日本児童文学者協会主催）の最優秀作品賞を受賞されました。受賞作品は『サクラ——日本から韓国へ渡ったゾウたちの物語』（学研）で、室町時代に南蛮船に乗ってきて足利将軍に献上された象をはじめ、韓国へ渡った象たちをとりあげた作品です。

キム・ファンさんはこれまで、主に動物を題材としたノン・フィクションや絵本を発表するとともに、自然保護活動にも参加、在日作家の立場から日本と朝鮮半島の文化交流にも力を注いでこられました。『サクラ』という作品はそうした活動の結晶であり、今回の受賞はキム・ファンさんの今後の創作活動に強い弾みとなることでしょう。

IBBY—Asahi賞を受賞

モンゴルの移動図書館

モンゴルの作家・詩人のダシドンドク氏が主宰するモバイル・ライブラリ「モンゴル子ども移動図書館」が、子どもの読書振興に果たした業績が評価され、2006年のIBBY—朝日読書振興賞受賞団体に選ばれ、9月中国で開催されるIBBY世界大会で賞を受けることになりました。ダシドンドク氏は一昨年の第7回アジア児童文学大会（名古屋市）にも参加して、「真夏のアイスクリームよりも絵本を」と題した発表で、この移動図書館の活動を報告するとともに、出版振興の願いを述べられました。

なおこの移動図書館活動には、日本の子どもたちから約1万冊の絵本が寄贈され、それらの絵本の翻訳に留学生が協力するなど、日本からの熱い支援があったことも忘れてはならないでしょう。



第5回韓国朝鮮児童文学セミナー

第5回韓国朝鮮児童文学セミナーが去る4月1日（土）午後、神戸学生青年センターで開かれ、参加者は20数名でした。

特に注目されたのは梅花女子大学大学院特別研究生・金永順さんの発表「総督府ハングル機関紙『毎日新報』の子ども欄研究」で、『朝鮮民謡集』『朝鮮童謡選』などの著作を日本で出版した金素雲と伝承童謡との関わりについての調査・論究でした。

もうひとつ注目されたのは、同じく梅花女子大学大学院に留学中の李惠英さんの講演「韓国の児童図書館事情」でした。国立オリニ青少年図書館やソウル市立オリニ図書館のほか、子どもたちにユニークなアプローチを試みる「奇蹟の図書館」や、「ヌチナム児童図書館」「ケヤキの木図書館」といった私立の児童図書館についても紹介され、韓国の人々の児童図書・児童文学に寄せる思いが感じられる、興味深い講演でした。また『モンシル姉さん』『悲しい下駄』や絵本『こいぬのうんち』で知られる作家クオン・ジョンセン（権正生）氏を2度訪ね、インタビューした京都女子大学大学院の多田香織さんの報告も興味深いものでした。

大阪国際児童文学館から

シンポジウム「韓国と日本の絵本」

大阪国際児童文学館では、2005年度から毎年アジアの国・地域の一つを選び、その国の絵本について1年を通して考えるという国際事業を行っております。

2005年度は「韓国」をテーマに、①シンポジウムの開催（3月12日）、②論文集の発行、③韓国の絵本貸し出しパックの作成を行いました。

シンポジウムでは、日本でも『くらやみのくにからきたサブサリ』（アートン）などが出版されている絵本作家チョンソングクさんと日本の絵本作家・田島征三さんにそれぞれお話をいただき、後半は韓国児童文学研究者の大竹聖美さんにコーディネーターをお願いして対談をしていただきました。

論文集は三宅興子先生を編集長に、日本への留学生を含む韓国の若手研究者5名と日本の研究者3名に「韓国の絵本」をテーマに論文を執筆していただき、シンポジウムの報告と合わせ韓・日・英語に翻訳しました。1冊2000円（+送料等）で販売中です。申込み・問合せは、大阪国際児童文学館まで。

TEL. 06-6876-8800

なお今年度は「中国語圏の絵本：1. 台湾」として、台湾の絵本をテーマに2005年度と同様の事業を計画しています。シンポジウムへのご参加等ご協力をお願いします。（主任専門員 土居安子）

金貨をくれるへび

インド古典説話「パンチャタントラ」より

再話・おのえたかこ 絵・寺岡正道



むさしのスカーレット・アジアお話の会

絵本『金貨をくれるへび』を出版

代表 野崎 斐子

私たち「むさしのスカーレット・アジアお話の会」は「日本の子どもたちが欧米のお話ばかりでなく、ご近所のアジア地域のお話にも触れて、バランスのとれた広い世界観をもった大人になってほしい」という趣旨で、幅広く活動しています。

その一つに、地域に住むアジアの国から来られた方たちにお国のお話や本を紹介していただき、翻訳して紹介するという活動があります。今回出版した『金貨をくれるへび』はその活動が本という形になった第1号です。市内に住むインド女性が語ったお話を聞き取り、地域の画家の絵によって絵本に仕上げました。出版社のてらいんくは私たちの活動を理解し、さまざまな形で応援してくれました。

再話の尾上尚子さんには6年前私たちが活動を始めた当初からさまざまなアドバイスをしていただきました。出版について素人だった私たちには大きな力でした。ここまでこぎつけられたのは、ひとえに尾上さんのお蔭と言って過言ではありません。

出来上がってみると、もっとこうすればよかったという反省もありますが、素人の私たちがよくここまで来られたとの思いと、お世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。活動はまだ始まったばかりです。次のステップを踏み出すべく、気持ちを引き締めています。

◆『金貨をくれるへび—インド古典説話「パンチャタントラ」より』おのえたかこ再話 寺岡正道絵
てらいんく刊 05. 11. 10. 1200円+税

インド児童文学の会から

インドでストーリーテリング国際会議

伝承文芸の宝庫インドで、来年2007年にストーリーテリング国際会議が開催されます。昨年同アジア会議には日本の「紙芝居文化の会」から2名の方が参加され、実際に紙芝居を上演されて高い関心をよび、アジアの方々と交流を深められました。会議の目的は文化の相互理解と子どもたちの読書習慣の促進です。世界各国の音楽やダンスや電子映像などさまざまな形式のストーリーテリングが披露され、講演とディスカッションが行われる予定です。会議の概要は下記の通りです。関心をお持ちの方は是非ご参加ください。



主催：AWIC (Association of Writers and Illustrators for Children, India)

IBBY インド支部

会期：2007年9月17～19日

会場：インディア・ハビタット・センター (India Habitat Center, ニューデリー市内)

参加費：250 USドル

問合せ先：Association of Writers and Illustrators for Children

Nehru House

4 Bahadur Shah Zafar Marg, New-Delhi 110002

TeleFax：91-11-23311095, 91-11-23316970-74

Email：awicbooks@yahoo.com

(インド児童文学の会：鈴木千歳

Tel. Fax. 042-584-9774)

◆◆◆雑誌紹介◆◆◆

『こだま』第28号 2006. 3. 30.

韓国(8篇)、ネパール(7篇)、台湾(7篇)、中国(4篇)の少年少女詩と児童詩が原作と翻訳で紹介されている。ほかに中国とインドのお話も。

年2回(春・秋)発行。購読者は寄稿できる。

◆問合せ先 東葛文化社・保坂登志子

TEL. 04-7172-5912

『小さい旗』第121号 2006. 3. 26.

中国児童文学作品の翻訳2篇

「オオカミ アーリ」常星児作 楽命祥絵 水上平吉・訳

「ブランコに乗ったオウム」李潼作 馬場与志子訳
ほかに中国の雑誌『小渓流』に掲載された永田喜久男の詩2篇「木瓜の家族」「乾杯」。

◆問合せ先 小さい旗の会・水上平吉

TEL. 093-661-4488

◇◇◇新刊紹介◇◇◇

韓国昔ばなし 上下

徐正五・再話 仲村修・訳 朴民宜・絵
白水社 06. 6. 30. (各2200円+税)



第一部「冒険と奇跡」から第六部「笑いのマダン」まで韓国昔ばなしのエッセンスとも言うべき100話が収められた本格的な昔話集である。再話者の徐正五氏は韓国における民話の再話・研究のオーソリティ。加えてベテラン翻訳家の仲村修氏、絵本『さんねん峠』や『モンシル姉さん』の挿絵などで知られる画家の朴民宜氏という三者の組み合わせがみごとなハーモニーを奏でている。

100話のうち約40話は日本ではじめて紹介される話だそうで、その点においても新鮮な昔話集だと言えよう。日本の昔話と類似あるいは共通した内容の話も多く、こうした昔話を通して身近な隣人たちへの親昵を深めたいものである。

中国の児童文学

中 由美子著 久山社 06. 5. 18.
＜日本児童文化史叢書39＞
(1553円+税)

中国児童文学の翻訳・研究者、中由美子さん執筆の『中国の児童文学』が久山社から刊行されました。

1910年代に始まった中国児童文学の今日までの歩みを概観したあと、80年代の活気あふれる動きを紹介、さらに中さんが翻訳等で深く関わってきた現代の代表的作家二人——『ある15歳の死』の陳丹燕と、『サンサン』の曹文軒について詳しく述べられています。陳丹燕の講演記録や、NHK教育テレビで放映された曹文軒との対談記録もあり、130ページとはいえ、中味が濃く、しかも親しみやすい内容になっています。

(久山社 Tel.03-3812-0253)

ヨニのビニールがさ

ユン・ドンジェ作 キム・ジェホン絵
ピョン・キジャ訳 (1300円+税)
岩崎書店 2006年5月30日

小学生のヨニは、雨にうたれながら道端にすわっている物乞いのおじいさんが気になって、朝の自習時間が終わったところでこっそり学校を抜け出し、自分のビニール傘をおじいさんにさしかけてあげた。下校時に雨はあがったが、お爺さんのすわっていたところにはビニール傘がきちんとたたんで立てかけてあった、というストーリー。

女の子のやさしさと老人の律儀さの響き合いに心が洗われるような思いがする。そして何よりも印象的なのが、キム・ジェホンの描く雨である。ここに描かれたザアザア雨は降雨量の多い韓国や日本、いわゆる北東アジアの雨で、そのリアルな表現に圧倒されてしまう。そのはげしい雨と緑のビニール傘がいつまでも頭に残る絵本である。

きみのうち、ぼくのうち

ヤン・ホアン文 ホアン・シャオイエン絵
中 由美子訳 (1300円+税)
岩崎書店 2006年5月30日

台湾における少年少女詩の先駆者と言われているヤン・ホアン(楊喚)の詩に、パリで10年間絵を学んできたホアン・シャオイエンの絵が組み合わせられた絵本。「葉っぱは 毛虫の ゆりかご。/花は ちようちよの ねどこ。/……」で始まり、「ぼくともうとは しあわせだ。うまれたときから あんしんして くらせる うちが ある。」で結ばれる詩は、素朴な表現の中に、地上のあらゆる存在の安らぎと調和をうたいあげているようだ。

ホアン・シャオイエンは俯瞰画面と樹木の描き方に特徴のある画家である。

あとがき

センターの再出発である。当面は情報センターとしての機能を支えるデータベースの整備と、会員を増やすことに力を入れていきたいと思っている。会員諸氏のご協力をお願いしたい。

当センターの前会長、故しかた・しん氏の遺作『衿子1936年』が四方定子さんによって出版された。スペイン市民戦争を取り上げたドラマティックな作品である。頒価1800円(送料200円)。ご希望の方は四方定子氏に申込みを。

TEL.&Fax. 052-751-9950

(畑中圭一)